

第10回日英シンポジウム Chemistry for Complex Biological Systems

日英シンポとは

日本化学会 (CSJ) と英国王立化学会 (RSC) は、両国交流の一層の促進を図るために日英シンポジウムを開催している。2007年の大阪での開催を皮切りに、日本と英国で交互に開催されてきた。本シンポジウムでは、次世代を担う若手・中堅研究者が主体となって特定のテーマの下で活発な講演および交流がなされている。

今回のシンポジウム

第10回目となる今回の日英シンポジウムは、東北大学で開催された第13回バイオ関連化学シンポジウムの翌日に同大学片平キャンパスで開催された。今回のテーマは新学術領域「分子夾雑の生命化学 (領域代表: 浜地 格)」の関連研究から設定し、“Chemistry for Complex Biological Systems” というタイトルのもと、日英の新進気鋭な中堅・若手が集まった。これまでの日英シンポに倣い、英国と日本側からそれぞれ5名 (計10名) の講演者が参画した。さらに今回は、当該分野の日本人中堅・若手研究者31名も集い積極的に交流することで、日英間でのより密度の濃い交流を期待した。

シンポジウム当日は、CSJから浜地 格教授 (京大)、RSCから Stephen Rumbelow 氏の挨拶で始まり、講演順 (以下敬称略) に、清中茂樹 (名大)、Martin Fascione (Univ. York)、後藤佑樹 (東大)、Yu-Hsuan Tsai (Cardiff Univ.)、萩原伸也 (理研)、Rebecca Goss (Univ. St Andrews)、花岡健



二郎 (東大)、Akane Kawamura (Univ. Oxford)、建石寿枝 (甲南大)、John Brazier (Univ. Reading) が、未発表のデータも含めた最新の研究成果を発表した。シンポジウム名のとおり、有機化学、物理

化学、分析化学、錯体化学、光化学など様々な化学的手法を駆使して複雑な生命を解き明かす、あるいは制御する講演が中心であり、休憩時間を削ってまで活発な議論が行われた。また、参加者全員がショートプレゼンおよびポスター発表を行った。ポスター発表は生体関連化学分野ともう少し幅広い分野の研究を含んでおり、昼食をとりながらのリラックスした雰囲気、より広い視野から当該研究分野に関する議論を深めた。

Reception & Speakers Dinner

このシンポジウムに関連するイベントとして、シンポジウム前夜に、参加者全員でのレセプションが開催された。CSJから澤本光男常務理事、RSCから Sarah Thomas 氏に挨拶をいただき、参加者全員で交流を深めた。また、シンポジウム後は RSC スタッフも交えた講演者ディナーを開催し、講演者間でさらに交流を



深めた。シンポジウムが終わった安堵感も重なり (!?), デイナーはかなり盛り上がった。急遽準備した二次会にも RSC スタッフを含むほぼ全員が参加し、終わったのは深夜0時をまわっていた。

おわりに

今回の開催にあたり、講演だけでなく参加者全員によるポスター発表などの要望も快く受け入れて準備して下さいました。櫻田恵美子氏 (CSJ)、和田健彦教授 (東北大) に心から感謝いたします。英国側に対して、日本人参加者全員の化学に対する熱意で“おもてなし”できたのではないかと思います。また、今回のシンポジウムを介して日英間での共同研究が新たに進み始めた、複数の参加者から連絡をいただいております。日英間を基軸とした国際交流が今後さらに展開することが期待されます。

〔清中茂樹 (名古屋大学大学院工学研究科)〕